新村出全集

第四巻

新村出全集

第四巻

新村出全集第四巻

昭和四十六年九月十四日　第一刷発行
昭和五十二年五月三十日　第二刷発行

著者　新村出

担当編者　泉井久之助
東京都千代田区神田小川町二ノ八

発行者　井上達三
東京都千代田区神田小川町二ノ八

発行所　筑摩書房
郵便番号　一〇一―九一
電話　東京(〇四)七六五一(代表)
振替　東京六―四一一三番

印刷　多田印刷株式会社
製本　矢嶋製本株式会社

落丁・乱丁本はお取替いたします

言語研究篇Ⅳ　目次

東亜語源志……7

序文9　再版本に序す10
南北に系統を引く日本語11　隼人語と馬来語17　印度更紗の源流23
支那印花布源流考資料29　間道考―日野間道を見て―39　琅玕考43　天木香樹63　知智乃実と銀杏77　鴨脚樹の和漢名85　羊の語源96　馬鹿考100　歌舞伎名義考105　「邸」の字音と「問」の語原116　家庭といふ語125　日本気質130　こころ134　左と右137　色彩空談148　装釘か装幀か154　外来洋語考158　和蘭ライデン大学訪書誌―特に日本及東洋語学の古書―168　英公使オルコックの日本文典173　世界言語志の古版本176　波行軽唇音沿革考180　国語に於けるFH両音の過渡期190　天平時代の国語197　言語の研究と古代史の研究215

語源をさぐる　1……219

自序221　再刊本序文222

序説 224　天と地 233　日と月 238　自成語と転成語 243　青空 247　しぐれ 252　風の名 256　朝やけ夕やけ、あけぼの夕ばえ 261　雲の名 264　雲の語彙 268　霞と霧 272　嵐気 274　象徴・自由 278　クリスマス 283　キリシタン用語 287　庚寅の歳・虎の語源 290　正月の門松 295　松竹梅 298　トラとライオン 301　鶴 302　餅の話 309　草の名・草花の名 313　犬のふぐり・松ふぐり 319　毒だみ 323　豆・ェンドウやソラマメ 327　樟の木 332　香と臭 336　にほひ 341　（附録）和名抄中の七語志—国書進講案— 344

語源をさぐる　2 …… 357

ウグヒス（鶯） 359　五月（サツキ） 367　暦月の名 375　春泥といふことば 381　民主といふ語 385　図書館と文庫 390　本（BOOK）の語源 399

単行本未載篇 …… 405

迷惑といふ語 407　「馳走」といふ語の歴史のため 408　賤民名称考 410　十（トウ）の語源 417　イットおよび其他の話 419　ウタの語源諸説 423　犬三題 428　天理の出典 432　頑張考 434　自由懐古録 444　自由の語義 449　どくだみ考 452　京洛漫歩 456　天地断想 460　楽書考 466　日本パン食史序説 470　梵語凡想 474　ちゆうちゆう蛸考 480　やつさもつさ考 481　皮算用考 485

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「ケヤキ」の語原其他に就いて488　語詞の出典490　隠語の興味493　国号とその称呼496　テーブルランド511　年輪随筆515　やまとことば520
ウサギの語源525　紙への感謝528
解説……泉井久之助　531
附記……新村猛　542

新村出全集　第四巻　言語研究篇Ⅳ

東亜語源志

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

序　文

この書は、私が折にふれて発表した語源語史の考証や論述や随筆などを集めたもので、単語志の外、国語史上の論文をも併録してあるが、主として国語漢語等の東亜語に関する小著に過ぎない。中に一二の旧稿をも収めてあるけれども、多くは近年の起稿にかかるものである。初めは全篇の末に於て各篇の増補と修訂とを試み且つ参考として関係ある諸家論著の書目をも附載するつもりで、その素材の用意を遂げ既に一部分の起稿に着手したが、遂に之を達成することが出来なかつたのは、著者の甚だ遺憾とする所である。纔に、著者が本書以外の著作に収めた同種類の論考の書目を附録し、又泉井久之助文学士の努力に成つた所の索引を添加することを得たことを以てせめて満足せねばならなくなつた。

題簽に狩野君山博士の筆を煩はしたのは、著者の深謝する所である。索引の編纂と全篇の校正とに関しては、一に泉井文学士の厚意に由りしこと、且つ近藤国臣文学士が校正に助力を与へられしこと、著者はこれに対して大に感銘の意を表する。

昭和五年十一月三日、秋晴の明治節の日

蘆屋の里に於てしるす

新村出

再版本に序す

『東亜語源志』の刊行あつて以来十有七年、其の間における東亜の振興大東亜共栄圏の成立を経て茲に其の再版が世に送られるやうになつたのは、夢の如き心地がする。至てさゝやかな業績の彙集ではあつたが、日本語を中心として大東亜圏内の南北両系統の言語を論じた諸章を含み、多少現代の時局に触れて読者の感興をそゝる所がないではない気がする。敢て率先などといふ筋合ではないが、ともかく幸にも再版の運に際会したことを微笑ましく思ふ。

曩に岡書院の厚意を負うて出たものが、今度は荻原星文館が継承して、初版に見劣りせぬやうにと、最善の奮発をしてくれられたことは、感謝に余りある。唯改訂増補の余裕のなかつたのを私かに遺憾に念ふばかりである。

昭和十七年九月二十一日

新村出

南北に系統を引く日本語

年々歳々十二支の話も近頃はちと月並に落ちて廃り気味ではあるが、毎年の佳例の如くその月並、いな歳並の巳歳に因んで蛇と云ふ日本語のことを一言弁じてお目出度い御多分に漏れぬことにしよう。伝説や故事は一切抜きにして単に名称のことを述べて、先づこの語が西北は朝鮮語に系統を引いてゐることを示さうと思ふ。

一体古来の日本語の中には、先住民族なるアイヌ人の語や近隣で昔は先進国なりし支那の詞などを除くと、朝鮮語を始め満洲語や蒙古語等と同源の語がかなり多く見えて居る。学者は日本語の根源を北方大陸系統と認めて所謂ウラルアルタイ語族に属するとか、或は少くとも同語族に一番近いとか云ふが、先づ単語だけでいふと日本語と朝鮮語との間には一致したもの類似したものが割合に多いので、一部の学者は早くも日鮮両語を一族と看做して居る。厳重な意味で一族と認めることは躊躇されるにしても、両方の言語が非常に深い間柄であることは、今日疑ふことは出来ない。多くの類似語の中から巳歳に因んで蛇の一語を取出して見よう。

蛇の古語は国語の中に種々あるが、最も普通なのはヘミで、中古まではヘビと云はずにヘミと云つた。『古事記』や『日本紀』や『万葉集』には見えないが、奈良朝の物では薬師寺の仏足石の歌に出て居るのが一番古い。平安朝の辞書の『和名抄』をはじめ『類聚名義抄』といふ字引にもヘミと出てゐる。『和名抄』にも既に「俗にヘビとも云ふ」と別の条に書いてあるから、雅言以外ではさうも唱へたものと見える。但し其物を嫌ひ且つ其名の頭文字を厭つたものと見えて、古くから十二支のときは上の字を略して単にミと呼んでをるが、何時が起源かわからない。

足利時代以来ヘビと云ふやうになつた事は、その頃の辞書などで知られる。

蝮は中古よりハミといひ来つたが、これは総称たるヘミと同じ語源であつて、大蛇をウハバミといふのもオホハミの義である。ウハバミと云ふ名は初めて足利時代の中頃の辞書に散見してゐるが、其頃始めて出来た語ではなく、由来する所はもつと古いに違ひない。最初これらのハミと云ふ語こそ、実は一般の蛇の総称であつたので、真虫(まむし)の意味に特称されたのは、却つて後の変遷である。琉球のハブといふ毒蛇の名称も、蝮のハミと類似してゐるから、右の如き意味上の変化も、無論上古の事であつて、その頭音が変つたのがヘミであつたのである。さればウハバミといふ合成語中に残るハミが、太古語の面影なのである。琉球では別に蛇をミミといつたと、明朝に出来た『華夷訳語』のうちの「琉球語辞書」にも、同代の『音韻字海』と云ふ琉語辞典にも、又清朝では名高い『中山伝信録』の「言語部」にも、皆さう出てゐる。支那人の聞錯へか書誤りかも知れぬが、若し正しいものとしても、ハミの変形であるに違ひない。

長くて蛇に似てゐる所から、鰻をハモといふのも、やはり『新撰字鏡』とか『和名抄』とかの中古の字引に既にハムと出て居るのに拠ると、その起源は古い。朝鮮語では鰻のことを蛇の如き魚といつた様な意味に唱へたことは、四百年前の字書の『訓蒙字会』に見える。こんな造語法は世界共通で、昔の希臘語でも、蛇と鰻とは同じ語の変体であらはされてをる。ホーマーもその詩篇中には、鰻を截然魚類意外に取扱つてある。その他の欧洲語の古い所でも往々さういふ関係になつてゐるから、日本語のハモは、元ハミから起つたもの蛇魚(へみうを)の義であることは、極めて確である。

以上種々の語は、示す実物即ちその意味は多少相違してゐても、ハミ、ハム、ハモ、ハブ、ヘミ、ヘビ皆同一語源の変形と看做される。然るに『古語拾遺』に由ると、日本で古語に大蛇(だいじゃ)を羽羽(はは)といつたとある。多分ハバと読んでよからうと思ふ。さればこの古代語のハバも前の一団の語と同源であるらしい。何の語が一番原形に近いかを論

ずるのは、茲では略するが、とにかく頭音はハであり、次の音はマ行音か然らずんばバ行音であつたと云へる。若し国語で解釈するならば、匍匐の意味のハフから出たものとして、這ふ物といふ意味が語源だと考へてもよい。無論その類語には蔓延の義のハフもある。類例としては梵語で蛇をサルパとも云ふが、これは這ふものと云ふ意味だ。羅甸語から出た英語のサーペントもこれと同根の語で、羅甸でもセルペンスは匍匐の義である。希臘では、同種の語を蛇に限らず一般の爬虫類や更に走獣にも亙て用ひてゐるが、梵語や羅甸語と同根の語を有つてゐる。これらの造語法から推して、日本語のハミやヘビ等を元ハフといふ動詞から出たと説明しても牽強の毀りは免れ得ると思ふ。

然るに朝鮮語に蛇をパイヤム或はペイヤムと唱へて居る。古くはパヤムと云つた様である。後世の『訓蒙字会』にはパイヤムと綴つてある。とにかく此の朝鮮語とハミ又はハム等の日本語とは音韻上非常に類似してをることは、国語波行の古音がパ行であつた事実を知る人は、何人も容易に認め得ると思ふ。朝鮮語にはパイヤムは直接に匍匐の義と連関してないが、これは前に挙げた若干の日本語と同根の語であつて、それを予輩は日本語の語根で説明して差支ないと信ずる。但し更にこの語根ハフをば漢語のホフクの匍匐から出たなどといふ考は、予の未だ取ることを欲せざる説である。

日本語と朝鮮語との同根語はこの外にも沢山あるが、今は已歳について右の一つに止めておく。日本語には蛇の異称としてヲロチだのクチナハだのと云ふ古語もある。クチナハは殊更に解釈する要はないが、古典の訓に見えるヲロチは尾ある魔神の義と説くか或は悪い魔神と説くか、或は恐れ拝む魔神の意味と説くか孰れにしてもチは古語の神の義で、タチの略であらう。崇拝又は畏怖すべき物としたに違ひないことは、アイヌ語でも蛇にカモイといふ辞を附加へることが多いので判る。蝮のことをトツコカモイと呼んだことは、百年前のアイヌ語辞書の『藻汐草』に見える通りである。日本でも『常陸風土記』に蛇を夜刀（やと）の神と呼んだことがある。夜刀はアイヌ語ヤチ即ち沼沢の義で、東国方言のヤツ（谷）に当る語であるから、夜刀神は沼沢の神といふことになる。蛟をミツチといひ、蝮

をノッチといつたことは、共に中古の辞書にあるが、一は水の神、他は野の神であるに違ひない。是等から類推すると、ヲロチは前の如く或一種の神と考へられたものと説き得る。タツ（龍）も国語学者中には起つの意味とするものもあるが、古語に蝮の字の訓をタヂ又はタヂヒとしてあるのに由り、又古典に見ゆる神様のタチ及び龍蛇の語尾に附くチ等から推すと、やはり恐るべき神といふ義から起つたのではなかつたかと思ふ。

序に蛟龍のミヅチの事を一言する。アイヌ語のミンヅチは日本語から入つたものであらうが、朝鮮語をはじめ満洲民族及び其の同分派の語中にも、類似語を認めることが出来るから、或は別の解釈に従はねばならぬかとも考へる。

予は未だ南洋語中に、蛇類の名称に日本語と同源的なものが有るか無いかを確めないが、一わたり近隣の南島語を調べた所では同根語は存せざる様である。一体南洋語には我国語と類似の語は甚だ少い、多少存しても、偶然の一致らしく考へられる場合が多い。大抵正当には一致だと認定し得ざる場合が多い。二三の場合には頗る信用するに足るべきものがないではない。その一は日本語の粳の名称である。蛇と穀物との取合せは、少し変であるが、次に附記して見ようと思ふ。

粳は国語で古くウルシネと呼んだことは、『和名抄』以来の辞書でも明かであるが、近世はウルゴメ或はウルノコメ或は単にウル又ウルチなどと唱へて居る。このウルシネ、ウルチ或はウルは日本語では如何に解けるか。姑く旧来の説に拠つて、ウル丈を切離して見ると、ウルは収穫が多いから、穫ると云ふ義と説く論があり、また光沢があるから潤沢の潤即ちウルホフのウルであると云ふ説があり、又は糯に対していふ粳はウルケたやうな所があるから名づけたのだと釈する人がある。いづれも的確な解釈ではない。『日本書紀』に由ると、天武天皇十年の条に、薩南の種子島は「粳稲常に豊かにして一殖すれば両収せらる」とあるのから察すると、その伝播した径路は、南島からではなかつたかと思はれる。而してウル等の語が朝鮮方面に関係語がないとすれば、その語の系統を寧ろ南方

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com